ヘルメット療法 自己負担

長女がいつも左を向いて寝ている――。東京都内の主婦、大倉夏子さん(39)が、そう気づいたのは、出産後のドタバタが一段落した生後2か月頃だった。肩の下に枕を入れるなどして逆方向を向かせようと誘導したが、うまくいかなかった。

近くの小児科で「多少頭にゆがみはある。気になるなら大きい病院で診てもらっては」と言われ、国立成育医療研究センター(東京都世田谷区)の「赤ちゃんの頭のかたち外来」を受診した。検査の結果、手術が必要になる難病などではないと確認できた。

大倉さんは「ヘルメットを着けて頭の形を矯正する方法もあると聞いたんですが、必要ないですか」と医師に尋ねたが、「この程度なら、やらなくてもよいと思います」と言われた。

赤ちゃんの頭蓋骨はやわらかいので、寝姿勢に向き癖がつくと、片方が平らになるなど左右非対称になることがある。軽度なら、多くは、寝返りやお座りができるようになると改善すると言われる。頭蓋変形は生後4か月時点では約20%に認められるが、2歳時点では約3%だったとするニュージーランドの報告もある。

ヘルメットを着けた長女を支える大倉さん。「この方法が必要なのか、当初は悩みました」と話す(東京都内の自宅で)

ヘルメット療法は、乳児一人一人の頭の大きさ、形に合わせて作ったヘルメットを入浴時間以外、半年程度装着し続け、ゆがみの矯正を図るものだ。向き癖があっても一方向からの圧力が強くかからないように設計されている。ただし、公的医療保険の適用対象ではないので、40万～60万円程度の費用は、全額自己負担となる。取り扱う医療機関も都市部に限られる。

一度は治療を見送った大倉さんだが、生後5か月頃に長女の頭を上から見たら「平行四辺形」のようになっていると感じた。左右の耳の位置もずれ、左耳がやや前に出ていた。

「歯のかみ合わせが悪くなったりしないだろうか。やっぱり治療を始めようかな」と思った。

しかし、成育医療研究センターは受診予約が1か月先まで埋まっていたため、同センターから紹介された「0歳からの頭のかたちクリニック」(東京都中央区)を昨秋に受診した。

最初に後頭部の左右差を計測すると、左側の容積は右側の80%未満で「最重度」と判定された。長女の頭に合わせたヘルメットを作り、装着し始めた。毎月1回通院し頭の形を計測、成長にあわせてサイズを調整する。この春には、左の容積が右の9割になり、左右差が目立たなくなった。院長の田中一郎さんに「順調に改善しています」と言われた。

大倉さんは「ヘルメットを着けないと治らないのかどうか、わからず悩んだ。高額な費用がかかるので、公的な支援があるとよいと思う」と語る。

＊過去記事はヨミドクターで

「受けたい医療　2023年版」が発売中。一般書店と読売新聞販売店で扱っています。